様々な側面で成長できるプログラム

エラスムス・ムンドゥス・ユーロカルチャー修士課程
小池陽香
(大阪大学大学院文学研究科アート・メディア論専攻　修士二年)

先日、プログラムに所属する学生全員が集まる集中講義をポーランドのクラクフで終えた後、昨年の秋とは気候も大きく違う、新鮮な気持ちでおよそ６ヶ月ぶりにイタリア・ウーディネを訪れました。ユーロカルチャーでの最初の１年が終わってしまったことに驚きつつも、長く、短かった１年を振り返りながら私の体験をお伝えしたいと思います。

２年前、修士課程の間に留学をしたいと考えていた私の目に入ったのがユーロカルチャーの学生募集ポスターでした。美術館の歴史が研究テーマの中心ですが、 美術館そのものと周辺の社会環境にも目を向けて研究をしていたため、どの専攻で留学するのが自分にとって良いのか模索していた時のことでした。ユーロカルチャー・プログラムの場合は、法学、政治、文化の分野を越えて学際的な思考を培うことを目的としていること、１つのプログラムに所属しながらヨーロッパの中で異なる環境に身を置けることが自分の研究に役立つと考え、応募を決めました。

とはいえ、プログラムの受け入れ通知とともに第２希望だったウーディネへの派遣が決まった時には、喜びとともにかなり大きな不安がありました。学部生の頃に１ヶ月だけフランスへ留学したことはあったものの、今回が初めての英語での長期留学であり、派遣先での言語であるイタリア語はほとんどできなかったからです。しかし、 いつでも相談にのってくださったウーディネ大学のコーディネーターさんをはじめ、周囲の助けを受けながら不安だらけだったイタリアでの生活にも少しずつ慣れて行くことができました。特に印象に残っている授業は、月に１回、合計３回のレポートを提出しなければならなかった歴史の授業です。毎回異なるテーマについて短期間で資料を集めなければなりませんでしたが、この授業を通して資料を探すためのキーワードの選び方、組み合わせ方の感覚をつかみ、英語でレポートを書くことにもなれることができました。ウーディネではクラスメートが 13 人と少なかったため、全員と話すきっけかも多く、一緒に図書館で勉強したり、近郊の町や国まで日帰り旅行をしたりと、とても楽しく過ごしました。また、学生寮のスタッフさんや寮での友人にも恵まれ、留学生活を送る上での自分のペースをつくることができました。

友人の家でのパーティー（ウーディネ）

変わって第２セメスターでは、希望していたフランス、ストラスブール大学への所属が叶ったものの、学生の人数も国籍のバラエティも増え最初は少し戸惑いました。前学期をともに過ごしたメンバーと固まりがちな時期もありましたが、グループ・プロジェクトに取り組んだ Eurocompetence II では国籍も前学期の大学も違うメンバーでグループを組むことになり、授業を通して新しいクラスメートとも打ち解けることができました。私のグループが取り組んだプロジェクトはあまり大きなものではありませんでしたが、国籍の異なるメンバーで文化的な違いを感じながら議論を重ね、企画・実行ができたことはとても良い経験になりました。また、ストラスブール大学では欧州議会、欧州評議会、欧州人権裁判所を訪問する機会がありました。

欧州評議会の見学（ストラスブール）

プログラムに応募するきっかけであったとはいえ、自分がこれまで専門としてこなかった分野の授業には苦労することも多々あります。私の場合は欧州連合の法律体系や欧州人権裁判所などの判例を理解することにはかなり苦労しました。しかし、新たな知識を得ることで自分のアンテナを増やすことができ、物事のより多くの側面に目を向けることができるようになったと感じます。６月末にポーランドで行われた集中講義でのグループワークでは、偶然第１セメスターの授業で知った EU の食品保護制度にかかわるトピックについて取り組むこととなり、自分が対応できる分野が少し広がったことを実感しました。

学業の他にも、ヨーロッパで学生生活を送るにはビザや滞在許可証の申請などの事務手続きも踏まなければなりません。どの国に行くのかによって申請方法や必要書類が異なり、私は第２セメスターの前にローマにあるフランス領事館までビザの申請に行きました。国籍によっても条件が異なる場合もあり、ある程度まではクラスメートたちと確認ができますが、最後は自分できちんと書類を揃えて提出しなければなりません。ビザ申請の必要ないヨーロッパの学生たちがうらやましいこともありますが、準備をするなかで問い合わせのメールを書くことなどにも慣れることができたので、これも１つの糧になるだろうと思っています。

出身地を問わず、多くの学生が英語圏への留学やヨーロッパ圏内でも英語で行われるプログラムでの短期留学を経験しており、友だちとの雑談にすら苦労した私は初めての長期留学にこのプログラムを選んでよかったのかどうか不安に思った時期もありました。しかし、他の学生も同じように英語への不安を抱えていたり、現地語のわからない、文化の違う土地で生活することに戸惑いを感じていたりするという点では共通しており、お互いに助け合い、励まし合いながら成長してきたと思います。多くの選択肢が与えられるプログラムなので、自分の意思次第で柔軟に、そして貪欲に学ぶことのできる環境であり、思いがけない発見や出会いもあります。もし迷っているのであれば、思い切って応募してみて損はないプログラムです。